

龍嘉寺十七号
正陽寺古年



松尾芭蕉

雲英末雄◇高橋 治

松尾芭蕉

雲英末雄◇高橋 治

藏書章

編集・執筆 雲英末雄^{うすお}（早稲田大学教授）
エッセイ 高橋 治

資料提供協力

麻生はる	瀬沼壽雄	逸翁美術館	俳文学会
池嶋洋次	田中道雄	出光美術館	芭蕉翁記念館
岡田友右衛門	玉城 司	岩波書店	文化出版局
沖森敏彦	千明三郎	MOA美術館	平凡社
奥村仁子	永井一彰	大垣市立図書館	北海道大学
片岡清子	長岡善一	開運堂	附属図書館
加藤定彦	西村弘明	柿衛文庫	本間美術館
菅野覚郎	野呂鎮子	桑名市春日神社	本隆寺
菊地晴子	橋間晃一	北村美術館	正木美術館
木村政之	波多江蔭子	義仲寺	山形美術館
雲英末雄	平田菊埜	京都大学 文学部頼原文庫	山中町立 観光資料館
藏 尚之	宮下正雄	江東区 芭蕉記念館	早稲田大学 図書館
小林豊廣	村上龍昇	向陽閣	早稲田大学 東洋美術陳列室
今 栄藏	村田いと	島田市	
桜井孝子	森川 昭	小 学 館	写真撮影 小嶋三樹
佐藤嘉一	山本茂貴	関口芭蕉庵	久米たかし
須崎和子	山本唯一	天理図書館	榊原和夫
関野勝子	吉田幸一	東京大学 総合図書館	長尾 宏
	朝日新聞社	那谷 寺	新潮社写真部



新潮古典文学アルバム 18

松尾芭蕉^{まつお ばしょう}

一九九〇年二月一日発行
一九九三年五月三〇日三刷

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二一

電話（営業部）03—三三六六—五一—

（編集部）03—三三六六—五四—

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

*価格はカバーに表示してあります

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社読者係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替え
いたします。

無断転載を禁ず。

恋をうたう芭蕉

高橋 治 2

松尾芭蕉

雲英末雄 9

はじめに

10

郷里伊賀上野

16

(寛永〜寛文期)

江戸移住・宗匠立机

22

(延宝初年〜延宝後期)

深川草庵の生活

30

(延宝後期〜天和期)

野ざらし・笈の小文の旅と庵住

38

(貞享期)

みちのくの旅——おくのほそ道

52

(元禄二年)

上方漂泊——『猿蓑』の成立

70

(元禄二年〜元禄四年)

晩年江戸の生活——かるみへの志向

84

(元禄四年〜元禄七年)

枯野終焉の旅

92

(元禄七年)

松尾芭蕉年譜

雲英末雄

関連資料

松尾芭蕉を読むための本

111 110 104

カバー絵Ⅱ小杉放庵画「芭蕉独行図」

編集Ⅱ木挽社

松尾芭蕉

雲英末雄

高橋 治



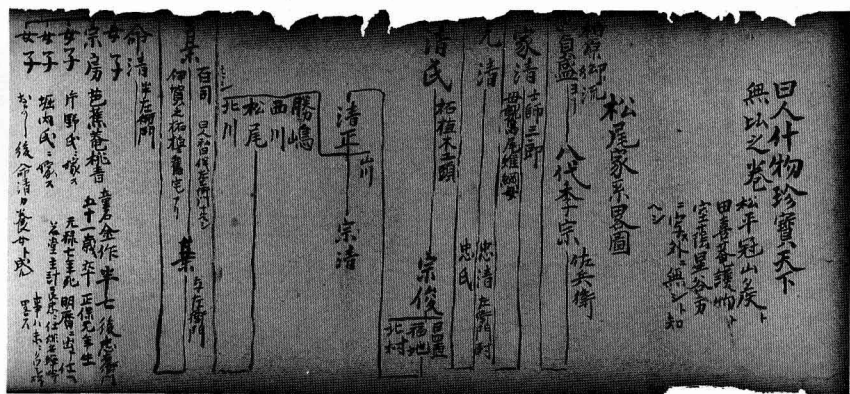
恋をうたう芭蕉

高橋 治

『文學界』恒例の歌仙を山中温泉、かよう亭で巻いていた時のことである。例の如く、初心未熟の上に才拙き私が昏迷の長考に入ってしまった、丸谷才一、大岡信両氏は時間を持て余されていた。

両先達の加わっておられる場を、私如き者が解説するのはまことに僭越な話だが、歌仙に於ける長考は碁将棋と少々違ったところがある。勝負事の究極の目標は勝つことにあるのに対して、歌仙には勝ち負けはない。勝つと、目指す点が一であれば、様々な道程があるにせよ、目標から逆に辿って多少なりとも次の出方が読める。だが、歌仙はそうは行かない。前句を受け、それに和しつつ別な世界に空想を馳せなければならない。打越と呼ばれる前々句の世界に戻ることさえ観音開きといわれて嫌われるのだから、上出来な作品ほどあやなす詩想の展開が見事なのである。

当然のこととして、歌仙では一寸先が全く読めない。つまり、



日人筆『蕉翁系譜』卷子一卷。遠藤日人が文政五年（1822）、星谷に書き与えたもの。芭蕉の系図や伝記等について、長年の研究の成果が示されている。芭蕉の顔面の特徴を示した左の箇所など興味深い

付句が出されてからでないと、次に進みようもなく、予測して次に備えることも不可能な上に無意味なのである。殊に私のような下手がまじった場合には、なおのこと、なにが出て来るかわからない。致し方ない成行きで、両先輩は忍耐の限度をためられることになる。

雑談、読書、高軒とその時間潰しの方法は様々だが、ある日『芭蕉七部集』の文庫版を繰っておられた丸谷氏がこんなことをいわれた。

「芭蕉の恋の句はどうしてこう上手いのかな」

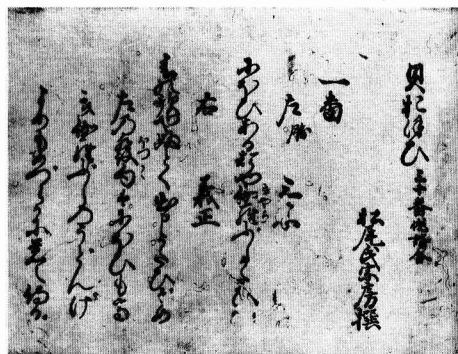
「そうなんだよ、女を知り尽しているって感じだね」

大岡氏の打てばひびくような返事で、両氏の芭蕉論が始った。話の面白さ、両氏を待たせる遠慮、発展しない句相の三重苦で、私は八つ裂きの目にあわされた。

両氏の話題は、求道者のな生き方をしたとされる芭蕉が、江戸でなにかあったとされている寿貞尼以外の女性と、どこでどんなかわりを持ったのだろうという点に集中されていた。芭蕉の発句や俳文にも男女の機微をうがったものが少くない。

『奥の細道』の市振の夜は、その点でつとに声価の高いところである。

あの個所が歌仙でいえば恋の句に当るとの評価も古来定着したものであって、あっさりとしたエピソードの捨て方にも、実



『貝おほひ』（天理図書館蔵）。横本一冊。宗房判。寛文十二年（1672）自序。江戸、中野半兵衛版。芭蕉の処女撰集。自他の発句を三十番の発句合せにして判詞を加え、伊賀上野の天満宮に奉納した。宗房は芭蕉の初号

に心にくいところがある。これは私だけの感じ方だが、ヘミングウェイの『殺人者』という上々の短篇を思い出さされる。勿論、状況も全く違い、人間造型も違っているのだが、潔癖なまでに余分なことを書かない点で、非常に共通したものがあるように思える。

しかも、市振の項は、行旅、行きずり、一期一会、それらのことを、直接的な表現を用いないで過不足なく感じさせるところが素晴らしい。この女どもは「捨て」と決め、捨てることによって、『奥の細道』全篇の主題をいやが上にもうたいあげているのである。

それだけではない。『奥の細道』本文には、

一家に遊女もねたり萩と月

の句を随行の曾良に書きとどめさせたところがあるが、周知の通り曾良の記録にはこの間のことが全く抜けている。この項が芭蕉の創作であって、意図的にさしはさまれたのではないかという想像がここから出て来る。

衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁させ給へと……芭蕉は僧体で、文意も仏縁を結ばせてくれと遊女たちがいったとしかとれないようになってゐる。しかし、下衆の勘ぐりと批判されることを承知でいえば、この「結縁」の語には、表の意の他にそこはかとなく匂うものがある。それも計算の中に入



「たび人と」(謡前書付)画賛。貞享四年(1687)から同五年にかけて『笈の小文』の旅の途次、熱田の東藤の描いた絵に芭蕉が賛をした。前書は謡曲「梅が枝」の一節である。芭蕉の句は「たび人とわが名よばれむはつしぐれ」で、芭蕉の旅姿が髣髴とする

っていることなのだろう。

発句も四季のみならず、恋、旅、名所、離別等、無季の句
ありたきもの也
〔去来抄〕

との芭蕉の言葉を考え合わせても、市振の項にはしたたかな
計算があると思わざるを得ない。

恋の句は歌仙一卷中の大切な彩りであり、そのことを十分に
心得ていた芭蕉が、数々の指導をしたことが弟子たちの著書に
も書き残されている。それらの中には、在来のあり方のように
形だけの恋ではならない、人生の真実なのだから、特に大切に
しなければいけないが、それは決して安易なことではないとさ
としたものがある。

理論としてもまさにその通りなのだが、実作者として自分の
うちたてた論を水際立ったものとして残していることに、丸谷
大岡両氏も感歎するのである。片耳でこの会話を聞きながら、
私は笑いを噛み殺していた。

というのは、いつであつたか、伊賀上野の養虫庵を訪ねた時
に、案内の老婦人がこんなことをいうのを聞いた覚えがあるか
らである。

「芭蕉さんというのは女癖の悪かった人ですてねえ……」

真実のほどは知らない。また、そんな話の裏づけになるよう
な資料があることも聞いてはいない。だが、俳聖の故郷には、



「ほろほろと」画賛（天理図書館蔵）。許六画、芭蕉賛。『笈の小文』の旅の句で、貞享五年（1688）春、吉野の川上村大滝西河での作。元禄五、六年（1692、3）の画と筆蹟。鯉屋伝来品

あるいはそんな語り伝えがあるのではないかと思えるような話しぶりだった。

推測だけでそんなことをいうのは不謹慎に近いことは重々承知だが、「若き時の妾にて」とされ、一時は芭蕉のもとを去って他家に嫁いだといわれる寿貞を後半生篤く遇した芭蕉の姿には、一種人生の辛酸をなめ尽して悟道に達した観がある。

芭蕉の留守宅に病む寿貞を見舞ってくれるように門弟に依頼したり、自分の子ではないという説が有力な寿貞の息子の次郎兵衛を大切に扱ったりする。そこにも、愛の歴史は歴史として、小さな存在に過ぎない人間をいとおしむ芭蕉の姿が、くつきりと浮かび上って来るように思えてならない。

去るも愛、背くも愛、再び頼って来るのも愛、丸谷、大岡両氏のいう通り、女を知り尽した男にして、はじめて持ち得る優しさを芭蕉は持っていたのではなからうか。

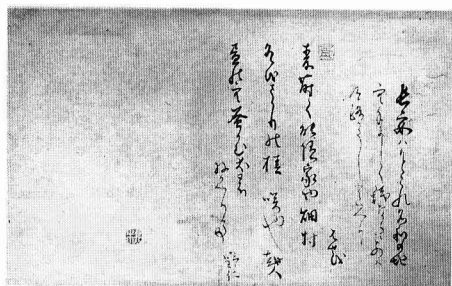
蘭の香やてふの翅にたき物す

芭蕉がある店で、遊女上りの女房にねだられ、白絹に書いたといわれる即興の句である。その店の先代の妻も遊女出身で宗因に頼んで句を書いてももらったことがある。

「私の名はてふといえますから、どうか私の名をよみこんだ句にして下さい」

女房は芭蕉にそう頼みこんだという。芭蕉は苦笑して仕方な

「麦蒔て」三物懐紙。『笈の小文』の旅の途次、罪を得て伊良湖崎に蟄居している『冬の日』の連衆の一人、名古屋の坪井杜国を越人の案内で見舞った折の懐紙（右）。発句は芭蕉で、脇を越人、第三を杜国（野仁）が付けている



「花をやどに」他二句懐紙。貞享五年（1688）三月十九日、ほぼ二十日ほど杜国とともに滞在した伊賀上野の瓢竹庵（岡本苔蘇の別邸）をあとに、吉野に出発するに際して染筆した。万菊丸は、伊良湖に蟄居中の杜国の変名で、芭蕉の吉野行脚に同行する際変えたもの（左）

く作つた句なのだろう。どう見ても上出来な句とはいえない。

俳聖の僻易する様も目の当りに浮いて来そうに思えるが、よしよしと芭蕉はサービス過剰ともとれるほどの句を作つてやつてゐる。女とは無知で厚顔な面があるにしても、かくも愛すべきものなのだといいたわりの心があつたのではなからうか。

それらの芭蕉の一面が歌仙の作品には如実に發揮されている。丸谷、大岡両氏を感歎させた『芭蕉七部集』中には、芭蕉の参加した歌仙が十八巻ある。その中十五巻に芭蕉は恋の句を作つてゐる。

恋は月や花と違つて、ここに出して来なければならないと決められた定座はない。初折りの表六句では避けなければならぬが、歌仙全体の流れの中で、ここぞと狙いを定めて詠みこむものといつても良いだろう。そのせいなのか、宗匠の果すべき役割なのか、一卷中に三句をよんだものが一作、二句をよんだものが一作ある。その悉くがとび抜けた秀句とはいわないが、感歎させられるのは、題材の多彩さである。

髪を切り隠棲する女、従兄との肉体関係、遊女、後朝、巫女、食欲減退、脱出、老醜、箱入娘、新妻、物思い、昼の情事、静御前、心身症の娘、密封の文等々、ただのひとつとして題材の重複したものがない。

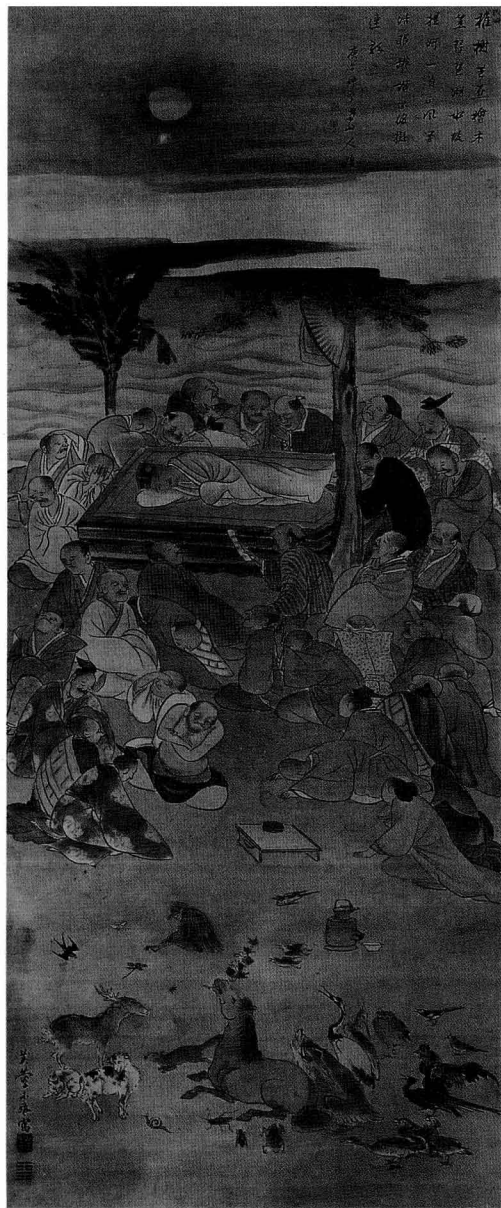
芭蕉のこうした面は、この先の研究課題のひとつになるもの



蕪村筆『奥の細道屏風』より「旅立ち」の図（山形美術館蔵）

だろう。俳聖としての芭蕉、俳諧の確立者としての業績、求道の生き方、組織者として実作者として生涯倦まなかつた実験と変革の提唱等に関して、賞讃すべき研究は無数にある。しかし、一個の男、性の煩惱を持った男としての芭蕉については、少々欠けるところがあるのではなからうか。

芭蕉は詩人なのである。そして、詩人は人生をうたう創作者なのである。丸谷、大岡両氏の雑談は、そんな点にふれていたのではないか。私は苦吟しながら、片耳でそう聞いていた。



鈴木芙蓉筆「芭蕉涅槃図」（早稲田大学東洋美術陳列室蔵）。芙蓉の「芭蕉涅槃図」に蜀山人（大田南畝）が賛をしたもの。賛には「椎樹芭蕉檜木／笠琵琶湖水跋／提河一自正風開／活眼俳諧不復擬／連歌／庚午仲冬 蜀山人題」とある。庚午は文化七年（1810）

芭蕉翁之像 門人夢中堂登翁行年七十八歲圖



松尾芭蕉

雲英末雄



はじめに

風風しきるる年々、
又長頭丸



松永貞徳発句短冊。「風風しも出よ長閑けき酉の年 長頭丸」(右)。「長頭丸」は貞徳の別号。この句は『犬子集(えのこしゅう)』に入集しており、「酉の年」より元和七年(1621)の作と思われる。長頭丸の号は、寛永十一年(1634)より用いているのでこの短冊の染筆はそれ以後である。『誹家大系図』より「松永貞徳画像」(上)。貞徳は寛永十一年ごろから、おのれの寿命がつきたと考え、生まれ変わったと称して自分の姿を童形にし、蓮の花を手に持ち、この年から一歳と数えはじめた

前ページ「芭蕉翁之像」(早稲田大学図書館蔵)。破笠画。破笠は芭蕉の画像を多く描いているが、これは七十六歳のときに描いた。「芭蕉翁之像門人夢中堂笠翁行年七十六歳図」とある

日本のながい詩歌の歴史の上に「俳諧」という独自の庶民詩をうちたてた松尾芭蕉は、三百年もの時代をへだてて、今もわれわれの心をうち、多くの人々の共感を得ている。

芭蕉は、元禄七年(1692)十月十二日、大坂の地で風雅にうちこんだ五十一歳の生涯を終えた。その一生は、年若い一時期武家奉公にはげみながら主君の死を契機にそこから離脱し、一時は仏門に帰依しようとするがそれもかなわず、結局のところ俳諧を天命と考えて、風雅一筋に貫き通したものと見えるであろう。

芭蕉は、はじめ言語遊戯的な貞門や談林の俳諧に興じるが、それらを乗り越えて真にすぐれた庶民詩として蕉風俳諧を樹立した。芭蕉が求めた根源的なものは、情の純粹性や真実性を意味する「風雅の誠」であり、それは、

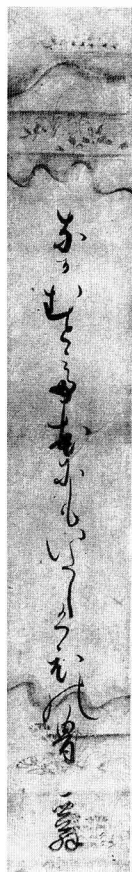


『犬子集』（早稲田大学図書館蔵）。大本五冊。再版は横本五冊。重頼編。寛永十年（1633）序。宗鑑・守武以後言い捨てにされていた俳諧作品を集め、貞徳以下貞門の人々の句を取めた近世において最初に出版された撰集。発句千五百三十余、付句千余、作者百七十八名



『俳諧百一集』より西山宗因画像。肥後国八代出身。談林俳諧の祖

西山宗因発句短冊。「ながむとて花にもいたしくびの骨 西翁」。「西翁」は西山宗因の別号。宗因の代表吟。「牛飼」（万治元年）に入集する。西行の「ながむとて花にもいたくなりぬれば散る別れこそ悲しかりけれ」（新古今集）の本歌取り



「不易」（永遠に変わらない、不変なもの）と「流行」（たえず変化し、流転するもの）という相矛盾する概念を統一する詩精神の精髓ともいふべきものである。

芭蕉はこよなく旅を愛した。それは自然や名所・旧跡、あるいは人情に接することにより、「風雅の誠」を追求し、自らの俳諧を高めようとしたからである。

芭蕉の魅力はなんといっても、ことばを選びぬき、推敲に推敲を重ねた完成度の高い作品を示したことである。それは人情の機微に触れ、ものの真実を鋭くつく。また自然を的確に描写し、人間の存在の何であるかを考えさせずにおかない。その上、新しみを求めて自分の考えをたえず変化させ、一刻の停滞もきらう。そうした自己変革の姿は、今日においてもなお新しく、われわれの心に迫ってくる。ところで、芭蕉を語るには「俳諧」について触れる必要がある。以下概略を述べてみよう。

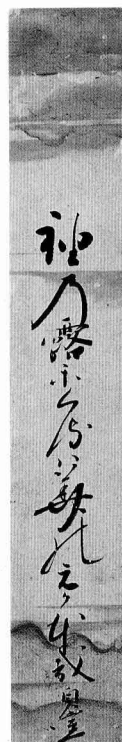
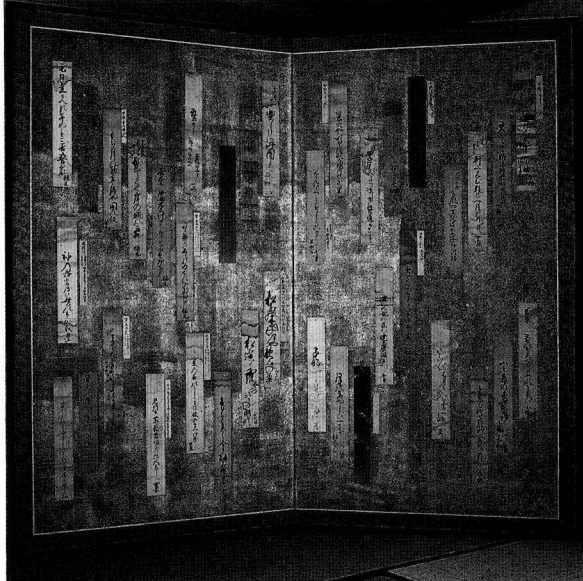


「連歌懐紙」(向陽閣蔵)。俳諧はもともと「俳諧之連歌」と称することく、連歌より派生したものである。連歌作品は、百韻を懐紙四枚にしたため、水引きで綴る形式をとる。この懐紙は『湯山三吟』(延徳三年〈1491〉成立)のものだが、実際に筆写されたのはやや後である

俳諧はもともと機智・滑稽を意味する文芸で、正式には「俳諧之連歌」といい、連歌から派生したものである。連歌は元来一首の歌を二人でかけ合いのように興じて詠むところから発展したもので、長句(五七五)と短句(七七)からなり、百句連ねる百韻の形式が鎌倉時代になって定着した。この連歌が室町時代の後期になると滑稽を主とする「俳諧之連歌」(略して俳諧)を発生させる。俳諧発生以前からの連歌は逆に著しく和歌的な色彩を帯びるようになり、両者は「雅」なものと「俗」なものへと分離することになる。「俗」な「俳諧」は、その後江戸時代には多くの人々に支持されて全盛期を迎えるのである。

連歌・俳諧とも原則として二人以上で行なう共同の文芸であり、形式的には百韻が基本となるものであるが、芭蕉の時代には三十六句つらねる歌仙の形式が一般化した。「俳諧」ということは、明治時代に至って「俳句」と区別するため「連句」という用語に変わり、それが定着した。

連句にはさまざまな規則がある。巻頭の句は発句といい、長句(五七五)の十七文字で季語を詠みこむことや切字を入れることが必



俳諧名家短冊張交屏風（二曲一隻）。徳元・玄札・重頼・令徳・貞室・梅盛・一品・以春ら貞門談林の三都の俳人の張交屏風。すべて三十八葉

要である。また何よりも連句一卷を率いる重要なものだから、一句が独立した風格をもち、余意余情が豊かなことが要求される。発句の次は脇句で、発句に打ち添えるように作るのが理想で、多く体言止めが用いられる。次は第三で、発句と脇でできあがった世界を、さらに一転変化させることが要求される。第三は、「て」「にて」「らん」などで留めることが多い。四句目以下は平句（ひらく）というが、最後の句は特に挙句（あぐ）といって祝意をこめてさりと終わることが多い。